慶 應 義 塾

ISSN 1349-6468

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第 6 号　2007年 3 月31日 発行

目　次

＊復刻版と偽文書　西川俊作…… 2
＊福沢研究センターの蔵書検索システムについて
赤堀美和子…… 3
＊講演会・セミナー概要…… 4
＊主な新収資料…… 8
＊主な動き……10
＊諸記録……11
＊スタッフ一覧……12

縦 172mm × 横 75mm × 厚 15mm

＊ 西航手帳 ＊

文久 2（1862）年幕府派遣の使節に従いヨーロッパを訪れた際、パリのフォルタン文具店で購入した手帳。小口に筆記用具を挿すための皮鞘が付いており、左右両方から書き進められて、真ん中あたりの14ページ分が白紙になっている。ヨーロッパ滞在中に見聞した様々な事柄が書き留められ、福沢の筆でない文字も相当数ある。たとえばロニーの署名は本人に書いてもらったものであろう。書き留められた言語は、日本語の次にオランダ語が多く、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・ポルトガル語など様々である。

参考文献：『福沢諭吉全集』第19巻（岩波書店、1971年）p.66–145

復刻版と偽文書

西川俊作（にしかわしゅんさく）
（福沢研究センター顧問・名誉教授）

復刻版とは『慶應義塾入社帳』のそれであり、偽文書とは『学問のすすめ』冒頭の一文にかかわる偽書簡であって、ともに当センターで私の関与したものである。

『入社帳』は慶應義塾への入学届を綴った簿冊（全30冊）である。文久３年（1863）春から明治34年（1901）11月にいたる約半世紀間をカヴァーしている。創立125年に際しこれの復刻が記念事業の一つとされたもので、福沢研究センターが編輯を担当した。全５巻、ならびに別冊索引を加え、本塾のみならず幼稚舎（一部）や大阪慶應義塾、大学部も含み、刊行は1986年である。センターの開設は創立125年に当たる1983年であったが、そのあと直ぐ125年記念図録の編輯、福沢生誕150年展などに忙殺されたので、『入社帳』の復刻は３年遅れになった。

編輯は私と職員の丸山信氏が担当者になり、塾史資料室時代に会田倉吉氏がつくっておかれたマイクロフィルムを生かして比較的順調に進めることができた。困難であったのは河北展生、佐志傅、高木不二の三氏担当の人名索引の作成であった。（私は86年秋にケンブリッジ大ダウニング・コレッジとの交換プログラムでセンターを留守にしていたので、「敵前逃亡」の形となり、索引作りの苦労を知らない。）

昨年暮れに他界された初代所長石坂巌先生は当センターが福沢研究に限定せず、広く「地方の門下生の活動も研究の柱にする」ことを強く望んでおられたから、この復刻版は先生の素志に適うものであり、刊行後には大学・研究所の外、都道府県図書館にも１セットを贈呈、地方史研究の足場の一つになったと思う。

＊　＊　＊

つぎは迷惑を蒙った話である。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」は知らぬ人とてない『学問のすすめ』初編、冒頭の一文である。1992，３年のことであったかと記憶するが、東北地方の塾員から塾長宛に、この名言は自家に伝えられた文書から福沢が借用したものだと主張している人物（和田喜八郎）が青森にいるが、それは確かな事実かという問い合わせ状がきたという。周知のように、この一文は「と言えり」と結ばれていて、 福沢独自の名文というより巧みな翻訳文であろうという説が行われているけれど、 質問者はもしも和田説が本当なら、東北人として喜ばしいといういささか身びいきの思いの籠もった文面であった。

そこで、古文書に強い坂井達朗副所長に調査を頼み、和田喜八郎なる人物に電話で訊ねてもらったところ、そういう史料はあるにはあるが、いま他の史料に紛れて見つからないから、探しておくとの返事であった由。ところが、古代史研究に打ち込んでおられる別府在住の野村孝彦氏がわざわざセンターに見えて、自分の撮った熊野山中の「猪垣」の写真を和田喜八郎に盗用されたが、『学問のすすめ』云々の話も捏造の疑いがあると示唆された。和田家文書とは、なんと第二次大戦後の自宅改築の際に屋根裏から見つかったという代物で、偽作の可能性が高く、それに基づいて書かれた『東日流（つがる）外三郡誌』（全５巻、1989－90）も多くの矛盾撞着や剽窃を含んでいるものの、東北地方では少なからぬサポーターがいるということも教えられた。早速同書を見てみると、いかにも「まがまがしい」作品で、すでに安本美典、原田実氏らが偽書だと批判していることも判明した。

そうこうしている内に強力なサポーターのひとり、昭和薬科大学教授古田武彦氏が突然センターに乗り込んで来て、和田家文書のなかにあったという福沢書簡なるものを持参された。私は古文書に疎く、また当センターではいわゆる筆跡鑑定は行わない方針を告げると、とにかく見てくれと強引に言うので、センター前の記念室でそれを披見したが、「これは和田家先々代の某が書写したものであるから筆跡は違うが、書かれている内容についてどう思うか」という問いで、確か明治５、６年の日付で大阪から出した手紙であったと記憶するが、その時福沢は東京在住であったこと、また漢字カタカナ交じりの書簡文など見たことがないこと、その他「学問」を「学文」と書くのは当時の語法であるが、宛名、署名に「士族」の肩書きをつけ、わざわざ花押を添えるなど、まったく福沢らしくないという意見を述べた。そして後日の研究のため写しをつくりたいと要望したが、古田氏は取り合うことなく、その偽書簡巻子本を箱にしまってそそくさと立ち去ったのである。

マスコミとこの後日談も少々あるが、それはさておき、いまインターネット検索によってみると、和田喜八郎は野村氏の訴訟に負け、1999年に死去した由で、当の偽書簡はどうなったか判らない。古田氏は定年退職され、和田喜八郎が盗んだ「自説」を説き続けているらしい。

福沢研究センターの蔵書検索システムについて

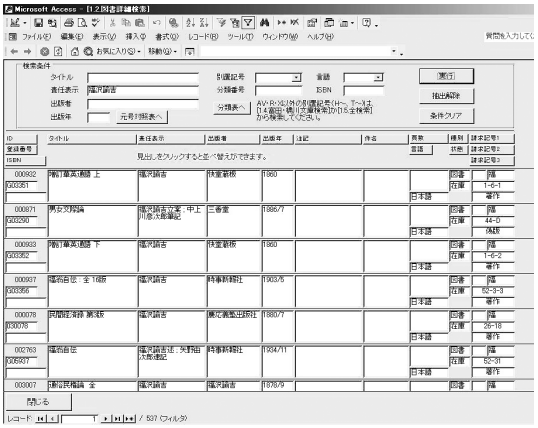
赤　堀　美和子（あかほり　みわこ）
（福沢研究センター係主任）

福沢研究センターは、福沢諭吉の著書および研究書、塾史関係、塾員に関する図書を中心として約４万冊の図書、雑誌を所蔵している。図書の整理は、手書きの基本目録カードを作成し、それをコピーして書名、著者名、件名のアルファベット順にファイルして蔵書の検索ツールとする方式を長年引き継いできた。しかし、コンピュータ利用が一般化した現在では、カード作成の煩雑さに加え、書名、著者名の最初の語がわからないと検索できず、リストの作成が容易でないなどの制約が顕著になってきた。そこで義塾創立150年に向けてますます繁忙になる業務に即応できるようにとの、センター所長からの強い要請を受け、2006年から蔵書の目録データのディジタル化に取り組むこととなった。

図書システムの選択については、既存の図書館用ソフトの導入なども検討したものの、当センターのように資料保存上の立場から一般公開を行わない研究所の小規模な蔵書には導入や維持に要する経費の点で現実的な選択ではないと判断された。そこで、義塾職員のパソコンに標準的にインストールされている ACCESS データベースを利用して費用をかけずに自前で開発することにした。2006年１月から図書スタッフの勝又由紀子がマニュアル書を手がかりに簡便な蔵書検索システムを３ヶ月間で開発した。データベース設計にあたっては『日本目録規則』を参考に入力項目を選定し、データにばらつきが生じないように入力規則を作成し、テスト入力を繰り返しては操作性の見直しを行い、徐々に改良を重ねていった。システムの初期メニューは利用者用と業務用とを区別している。主な機能は、入力、修正、検索、除籍処理、帳票・ラベル出力である。検索は、図書、雑誌別や複数の項目を横断してのキーワード検索が可能である。利用者検索用としては、事務室内のパソコン１台にインストールし、定期的にデータの更新作業を行っている。

システムの概観がほぼ決まったところで2006年４月より新着図書の入力を開始した。同時に従来のカード目録は凍結した。次に遡及入力作業に着手したが、すでに2003年度より図書の登録台帳を EXCEL ファイル形式で作成していたので、そのデータを ACCESS ファイルに移行し、実際の作業は、2002年度以前受入分が対象となった。入力作業要員として５月以降、アルバイト１名が週２日間、集中的に入力を行っている。センターの重要な主題である福沢、慶應義塾、塾員関係の図書を優先して作業を進めた。ただし、塾史編纂所時代の蔵書はカードの記述が不十分なものが多く、入力前に書架上の図書とカードとの照合が不可欠であった。旧分類と新分類が混在していたり、センター発足以来蔵書点検が行われていないため、登録番号や請求記号が付与されていない図書が数多く存在し、蔵書の再整理を伴う作業になり、予想以上に時間と労力を要した。2007年２月現在のデータ件数は約３万件、蔵書全体のおよそ四分の三の入力が完了した。また、過去に冊子体目録として刊行した富田正文氏および橋川文三氏旧蔵書籍目録のデータの搭載の実現により、これらの目録も併せて検索可能となったこともデータベース化の大きなメリットである。

今回の遡及入力作業は、年度内に大方終了させることを優先したため、ページ数や注記事項などの詳細情報の入力を省略して進めてきた。そこで全蔵書の入力が一通り終了した後に未入力の項目を追加し、完全データとする二次作業を予定している。また、明治期の福沢著作の版本は遡及入力の対象としていないが、この重要コレクションのデータベース化については研究者の意見を取り入れつつ検討していく方針である。現在はパソコン１台のみで入力を行っているが、今後さらに作業の効率を上げるためにはセンター内部でのネットワークによるシステムの共有も必要である。将来的により操作性の良いデータベースを手軽に導入できる時期が来れば、システムの移行も柔軟に検討すべきであろう。当面はセンターの蔵書目録データの一般に公開する予定はないが、将来、条件が整った場合に適応できるようなデータ環境の整備を目標に作業を進めているのが現状である。



図書詳細検索画面

日本的経営者 武藤山治

川口 浩（かわぐち ひろし）
（早稲田大学政治経済学術院教授）

講演中の川口 浩氏

武藤山治は、言うまでもなく、日本における初期の成功した近代企業経営者として著名な人物である。生まれは慶応3（1867）年で、江戸時代を実質的に生きていない。また、明治6（1873）年に出来たばかりの小学校に入学しており、明治学制下でその修学歴を開始した第一世代に属している。小学校卒業後、郷里（現・岐阜県海津市平田町）から上京し、慶應義塾に学び、さらに米国に二年間留学している。こうした先端的学歴と鐘淵紡績株式会社を日本一の優良企業に育て上げた実績とは、確かに符合しているように見えよう。しかし、彼の経営が「温情主義」「家族主義」などと称される特徴を有していることも、よく知られている通りである。彼自身も「鐘紡ではどこまでも一家族としての親切を旨としてゐる」（『武藤山治全集』第1巻、162頁）と述べている。武藤山治は、日本における「近代」というものの出自を探ろうとする場合の、一つの恰好の素材である。

さて、経済思想史の観点から武藤を見ると、4つほど、その特徴を挙げることが出来る。第一は、経験的・現実対応的な思惟である。彼は、普遍的・抽象的な原理よりも、個別的・具体的な、目の前で生起している事実に実在性を感得し、それを基底に据えて思考し、行動する人物である。第二は、人間を生まれながらにして人間関係すなわち社会の中に生きる存在と見なす人間観・社会観である。人間関係・社会が本源的であり、それに先行する孤立的個人といったものの存在を実感し得ないということである。第三は、こうした人間から成る人間集団は、その内部に抜き差しならない利害対立を含まない調和体であるという感覚である。「家族」はその代表であろう。そして最後は、人は自分が帰属している人間集団の中で、その立場に応じた責務を負い、それを実行しなければならないという責任感、職分の意識である。

では、これらの特徴は武藤自身においては具体的に如何なるものとしてあったであろうか。まず何よりも、彼にとって鐘紡は株主・従業員・経営者たる自己の三者から成る人間集団であり、従って自分自身は経営者としての責任を全うしなければならない。そして、その場合の自己の経営責任の具体的中身は、鐘紡の利潤・株主への高配当・従業員の厚遇・顧客への高品質低価格商品の供給を実現することである。彼が社内外の人々の経済的利益を強く意識するのは、経営者として当たり前と言えばそれまでであるが、彼の経験的・現実対応的な思惟の結果であることも見逃されるべきではない。また、しばしば指摘される従業員の待遇改善は、確かに「温情主義」と呼ぶに相応しいかも知れないが、それは彼の経営責任の当然の一部であって、経営責任の外に何らかの別の「主義」を想定する必要はないように思われる。

武藤山治を日本の経済思想史の流れ中に置いてみると、彼の物の考え方はいずれも江戸時代以来の日本人が慣れ親しんできたものばかりであるように思われてならない。その意味で彼は「健全な常識人」であり、彼の一見したところの先端性よりも、むしろその思想の在来性と鐘紡という企業の近代性の整合にこそ強い興味を覚えるものである。

（本稿は2006年11月7日に行なわれた第4回福沢研究センター講演会の概要である。）

荘田平五郎と三菱の経営近代化

武田晴人（たけだ はるひと）
（東京大学大学院経済学研究科教授）

明治初期の慶應義塾に学び日本経済の屋台骨を支えることになった経営者として代表的な人物である、荘田平五郎は、福沢諭吉が「学問をやらしても、算盤を弾かしても、荘田はふたつながらできる」（『荘田平五郎』p.287）

講演中の武田晴人氏

と評価したほどの逸材であった。

弘化４年10月１日（1847年11月８日）、豊後国臼杵（現・大分県臼杵市）に、臼杵藩の儒者荘田允命の長男として生まれ、藩校で漢学を修め、のちに江戸に出て英学を学んだ。明治３（1870）年に慶應義塾に入塾したのち、福沢に見込まれて義塾分校設立のために大阪、京都に派遣され、あるいは「慶應義塾社中の約束」の起草にも関わるなどの短い間に大きな足跡も残している。

明治８（1875）年三菱に入社した荘田は、学問で身を立てることを前提にした「学資稼ぎ」の腰掛けの印象もある入社の経緯にもかかわらず、その商学・会計学の知識を生かし、社主岩崎弥太郎に三菱に欠くことのできない人材と認められ、次第に三菱の中で枢要の地位を占めることになる。

荘田が三菱の経営近代化に果たした役割は、第一に、「三菱汽船会社規則」「郵便汽船三菱会社簿記法」など経営の基礎となる諸規定の制定に参画し本社による管理的な組織の基盤作りをすすめたことであった。また、荘田は各事業所（三菱では「場所」と呼ぶ）から月次などで定期的に報告を提出させるなどの情報の本社集中を進めることになる。

第二の役割は、三菱の経営多角化に果たした指導力であった。特に、丸の内練兵場の払い受けによるビジネス街建設計画は荘田の意見具申によるものとされている。また、三菱銀行の母体となる銀行業への新規参入も荘田が郷里臼杵に設立された第百十九国立銀行の救済に手をさしのべたことがきっかけとなったものであった。第百十九銀行を傘下におさめた三菱は、明治28（1895）年に三菱合資会社に銀行部を設けてこれを継承した。

第三の役割は、三菱の事業の柱の一つとなる長崎造船所の改革に自ら陣頭指揮をとったことであった。明治半ばに三菱は政府の勧誘もあって製鉄業への進出を検討するなど経営戦略の岐路にあったが、社長岩崎小弥太の意思は造船業の拡大であった。この経営方針を現実の事業として結実させるため、荘田は長崎造船所において、従来の修理工事中心の事業形態を大型の貨客船の新建造へと切り替えていくことになる。本店の管事（社長に次ぐ専門経営者としての最高位）という要職に在職のまま長崎に赴任した荘田は、積極的な設備拡大によって大型船建造への途を切り開いた。さらに、荘田は新船の建造に伴って管理会計上の問題が発生していることに着目し、造船所の原価計算法などの改革に取り組んだ。また、「傭使人扶助法」「職工救護法」などを定めることで労務管理制度を確立し、所内には工業予備校を設立し自前で職工の養成を図るなどの施策を実施した。

荘田は、「財閥は人のやれない難事業を引き受けて国家に報いるべきだ」という信念を持っていたといわれるが、彼は、会社の設立を計画する日本の企業家たちが短期的で投機的な利益を追い求め、そのための組織として株式会社組織を悪用していることに批判的であった。ここに、経営者としての荘田の事業観が凝縮されているように思われる。

（本稿は2006年11月17日に行なわれた第５回福沢研究センター講演会の概要である。）

会社の誕生

高村直助（たかむらなおすけ）
（横浜市歴史博物館館長）

講演中の高村直助氏

日本の急速な工業化をもたらしたのは、ハード面での機械とソフト面での会社制度の西洋からの導入であったが、歴史的前提の乏しいなかで会社の急速な普及が如何にして可能になったかを問題にしたのが、旧著『会社の誕生』（吉川弘文館、1996年）であった。ここでは、それを前提に、「会社」の導入・普及と福沢諭吉のかかわりを、以下の３点について考えたい。

① 「会社」という言葉と福沢。『西洋事情初編』（慶応２年・1866年刊）での「商人会社」がその初めというのが、穂積陳重『続法窓夜話』（1936年）などによる通説であった。しかし「会社」の初出は、杉田玄端によるプリンセンの訳書『地学正宗』（嘉永４年・1851年）であり、そのオランダ語の原義は学会ないし組合であって、幕末には共同出資の営利企業は、長崎奉行岡部駿河守長常の意見書（万延元･1860年）を初出として「商社」と呼ばれたことが、馬場宏二『会社という言葉』（大東文化大学経営研究所、2001年）の探求によって明らかにされた。

『西洋事情初編』刊行に先立つ写本では「商社」とあり、慶応４（1868）年に「慶應義塾会社」と名乗っているように、幕末の福沢も上記の意味合いで「会社」を用いていた（佐志伝「会社、同社そして社中」『近代日本研究』第１巻、1985年）。

明治に入って「商社」が「会社」に置き換えられて行くのは、幕末には貿易や商業の分野に限って考えられていた共同出資営利企業を、より広い分野で奨励する場合に、「商社」の呼称は語感としてふさわしくなかったからではないか。「会社」が一般に普及する画期は、明治４（1871）年に渋沢栄一が起案した大蔵省事務章程と、それを受けた県治事務章程が、許可する対象を「諸会社」と呼んだことにあると考えられる。

② 企業勃興と福沢。明治前期には株式会社が誕生し始めたが、政府や地方官の強い勧奨によるものなどが多かった。しかし、貨幣制度が確立し利子が低位になったのを契機に、明治19（1886）年から22（1889）年にかけて、鉄道や紡績などの分野で、民間人が自発的に株式会社を設立する第一次企業勃興が生じた。福沢は『時事新報』での社説を通じて、鉄道を中心にその動きを先導し、またその動きの定着を図った。

松方デフレさなかの明治16（1883）年末に、上野・本庄間開通の日本鉄道会社が年１割の利益を出す見込みとなったことを捉え、「大に鉄道を布設するの好時期」（12月１～３日）であると、不況下で運用に困っている余裕資金を鉄道株に投資することを呼びかけ、３年後からの鉄道ブームを先導した。また企業勃興が顕著になると、甥の中上川彦次郎が社長を務める山陽鉄道の動向をたびたび取り上げるが、同時に、「鉄道財産」（1890年１月16日）などで、富豪に向けて、土地・国債と比較しながら鉄道株投資を強く勧める議論を再三展開している。

③ 会社設立と富くじ。共同出資の前史が乏しいなかで、有限責任の株式投資が短期間に受け入れられた前提の一つとして、旧著においては、江戸時代における寺社興行の富くじの広まりがあったのではないかと推測しておいた。福沢は、パナマ運河会社やパリ博覧会の例を挙げながら、有意義な大事業に「富附株券」を活用することを提案していた（「富籤法の利用」1890年２月６～７日）。

（本稿は2006年12月１日に行なわれた第６回福沢研究センター講演会の概要である。）

福沢諭吉の経営者観

── 福沢諭吉書簡を中心に ──

川崎（かわさき）　勝（まさる）
（南山大学経済学部教授・福沢研究センター客員所員）

福沢諭吉は、文明論、教育論、経済論、時事論など、多彩な文筆活動を行なった。こうした中から、ここでは「経営者」についての見方を取り上げて考えてみたい。

福沢は、実は自らも経営者でもあった。まず、第一に著述家として脚光を浴び、塾・学校経営を主宰して門下生を育成し、同時に出版業をいとなみ、さらには新聞発行を通じてオピニオンリーダーとなり、また有数な投資家でさえあった。

『西洋事情初編』は15万部を売り上げ、17,500両の収入を得た。これに英字新聞の翻訳、次々と出版される翻訳書の収入などで、福沢塾・慶應義塾の財源を得ることができた。ここで注目されるのは、1872年の慶應義塾開業届の属籍に、「商　福沢諭吉」や「町人　福沢諭吉」と記されていることである。福沢は意識的に「士族」を捨てて自らを「商人」と位置づけたのである。それは、1869年に書物仲間問屋組合に加入して、出版業者福沢屋諭吉が誕生したときに始まったと考えられよう。72年に創業した慶應義塾出版局は、55,050両を有し、「出版局……一年拾弐、三万両之商売ハいたし、随分インポル

タンスなれども、人之なき為メ手を広くするを得ず、歎息之至なり」（中上川彦次郎宛書簡147）というほどに急成長していた。明治十四年政変後の福沢の主要拠点となる『時事新報』は、「新聞之資本仲間ニは加入可致との御話……他人之加入ハ決して求めさる積なれ共、内々之人ハ不苦と存候」（中村道太宛638）と、他者の介入を極力排除した。そして丸家銀行や横浜正金銀行、鉄道・鉱山などの対する投資活動は、失敗も含めて福沢の企業家としての資金源となった。

福沢は、近代企業家に期待し、2006年度の講演会・セミナーで取り上げられた多くの人材を育てた。明治前期に福沢が評価し行動を共にした人物に、早矢仕有的と中村道太がいた。丸善の創業者早矢仕有的を「兼て同志廉潔之人物」（九鬼隆義宛83）と評し、早矢仕の主宰する丸屋商社、自力社会、細流会社、丸家銀行に福沢も参画し、福沢英之助にも商業による一身の独立を説き、丸屋の経営に参加して商業による独立に備えることを勧めていた（127、129）。中村道太も、早矢仕の事業に中核におり、福沢との付合いも深く、横浜正金銀行頭取に推挙している。

福沢が経営手腕を最も評価したのは、岩崎弥太郎であった。後藤象二郎の所有になる高島炭鉱の岩崎へ譲渡させようとする執拗な福沢の斡旋は、福沢書簡の圧巻の一つである。事実、それがのちの三菱財閥の基礎となった。門下生荘田平五郎の三菱入りは、定款の作成をはじめ、三菱の近代企業への脱皮を推進させる原動力になった。

甥で門下生の中上川彦次郎は、『時事新報』で社長を務めたのちに、山陽鉄道の社長に就任し、次いで三井銀行に移って三井改革に奔走した。

晩年福沢は、「尚商立国」を高唱した。これは、福沢自身が当初自らを「商人」と規定したように、一貫した立場でもあった。政治、法律、教育などの精神的進歩に立ち後れた実業界の文明実学に基づいた進歩を期待した。近代日本の経営の条件として、政府の干渉を排除して、広い知識見聞、気品高尚、そして秩序整序を重要視した文明教育を経た後進の士人が不可欠であった。その新たな経営者像のモデルが、名声の確立した大会社に入って改革を推進した荘田平五郎と旧家に入って家運を挽回した中上川彦次郎であった。

（本稿は2007年１月27日に行なわれた第４回福沢研究センターセミナーの概要である。）

◇春の講演会・セミナー

≪講演会≫「中国と日本の近代化比較」
盛邦和 氏（上海財経大学人文学院教授、同大日本亜洲研究中心主任・歴史学研究所所長）
５月８日（火）午後３時30分～５時
会場・三田演説館

≪セミナー≫「福沢諭吉の立身出世論」
ティモシー・Ｊ・バンコンパノール 氏（ウイリアム＆メアリー大学助教授、本塾経済学部訪問助教授）
４月21日（土）午後３時30分～５時
会場・三田 研究室棟７階法学部共同研究室

≪セミナー≫「福沢諭吉の「個」の観念」（仮題）
グエン・ティ・ハイン・トウック 氏（ホーチミン市外国語情報科学大学東方学部講師）
７月14日（土）午後３時30分～５時
会場・三田 研究室棟１階Ａ会議室

＊講演会は広く一般の方を対象とし、セミナーは大学院生レベル以上の方々による研究会の形をとっています。
＊上記の他にも、現在企画中の講演会があります。ホームページ、ポスターなどのアナウンスにご注意下さい。

主な新収資料

平成18年９月から12月までに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。

福沢諭吉書簡

■ 隈川宗悦・南条公健宛書簡　４通１巻

隈川宗悦は天保９（1838）年岩代国伊達郡高田村の生まれで、父は幕臣。万延年間に江戸の西洋医学所に入所した。文久３（1863）年から江川太郎左衛門に仕え、その後幕府の軍艦医官、海軍養生所長などを歴任した。明治維新後は松山棟庵らと共に東京医学会社を創設、明治14（1881）年には松山や高木兼寛らと成医会講習所（現在の東京慈恵会医科大学）を創立した。明治35年死去。南条公健は、残っている書簡の内容から福沢と適塾の同窓であったと考えられるが、経歴の詳細は不明である。幕末期は一橋家の医師であったかと思われる。

今回福沢研究センターが購入した書簡は、隈川・南条連名が１通、南条宛が１通、隈川宛が２通の計４通で、巻子１巻にまとめられていた。隈川家に伝えられたものか、南条家かは不明である。発信年代は文久３年から慶応２年（西暦では1867）にかけてで、内容は４通とも『続福沢全集』第６巻（岩波書店､1933年）の時点ですでに紹介されており、新資料ではない。しかしその後の『福沢諭吉全集』第17巻（岩波書店、再版1971年）編纂時にも『福沢諭吉書簡集』（岩波書店、2001 ～ 2003年）編纂時にも原本の所在がわからず、校訂がなされなかった。今回原本と比べると、特に文久３年の発信と思われる隈川･南条宛の書簡は『福沢諭吉全集』や『福沢諭吉書簡集』所収のものとはかなり相違があり、底本が異なると思われる。校訂結果は『近代日本研究』23巻（2007年３月末刊行）に掲載する。

○隈川宗悦・南条公健宛　文久３年月日未詳

薩英戦争に関するイギリス国民の反応やポーランドをめぐる欧州諸国の様子などの情報を伝えたもので、文中判読不明の文字の脇には「本ノママ」とあり、何かを筆写したものであろう。

○南条公健宛　慶応元年８月16日付

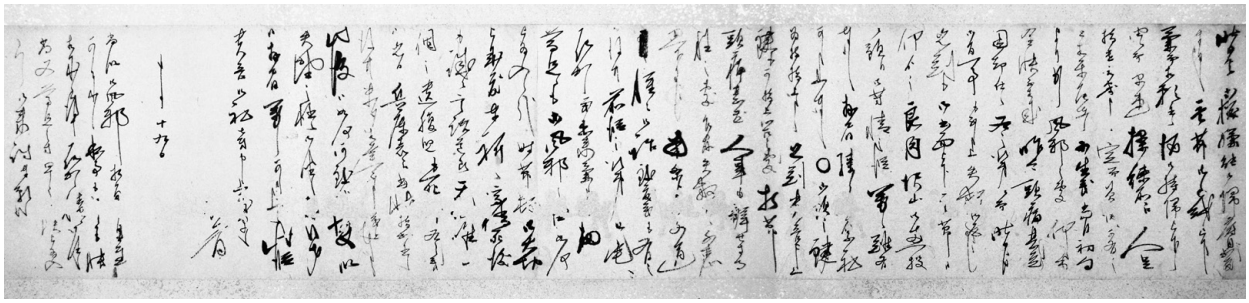
適塾以来の親友高橋順益の死去により、高橋家の後事について託したもの。

○隈川宗悦宛　慶応元年10月19日付

贈物に感謝し、高橋順益歿後の高橋家について相談している。虫害により10文字前後が判読不能である。

○隈川宗悦宛　慶応２年12月７日付

『西洋事情』『雷銃操法』を贈呈し、宣伝を依頼する。美しい花模様が描かれた封筒が使用されている。



■ 向野新造・向野勘三宛書簡　１通（額装）　【松尾迪子氏・松尾憲治氏所蔵】

明治27（1894）年４月13日付。向野新造は中津出身で、福沢諭吉が幼かったころ近所に住んでいた。勘三はその息子。この年福沢は、長男次男をともなって墓参りのため帰省した。その中津滞在中に訪ねてくれたことに感謝し、母親への見舞いを述べ、東京見物を勧めている。

福沢諭吉遺墨

■ 小泉信命名書　【塾員佐々木信雄氏寄贈】

小泉信は慶應義塾長を務めた信三の妹。父信吉が46歳で亡くなって１週間目の明治27（1894）年12月15日に生まれた。

第172回福沢先生誕生記念会展示

１月10日の福沢先生誕生記念会および新年名刺交換会にあわせて、福沢研究センターによる恒例の資料展示を行った。今回は、会場を西校舎地下１階から旧図書館１階福沢記念展示室に移し、例年通り、誕生記念会の記念講演に関連した資料と、本年度福沢研究センターが新たに収蔵した資料を展示、多くの方に来場していただいた。

本年は、福沢の曾孫に当たる福沢武氏（慶應義塾評議員会議長・三菱地所株式会社取締役会長）が「私にとっての福沢諭吉」と題して講演されたことから、関連資料として福沢の子女と関わりの深い『福翁百話』『福翁自伝』草稿、「ひゝのをしへ」を展示した。

『福翁百話』は明治29年に『時事新報』紙上に連載され、福沢の老境の思想を示す著作として知られるが、その草稿は、子どもたちが分割贈与を希望したため、発表後巻子にまとめられ、第１巻と第10巻を長男一太郎が、残り８巻を次男捨次郎以下８人が所蔵、今回はそのうち第１巻を展示した。また、『福翁自伝』草稿は、明治30年から31年にかけて福沢が口述したものを速記者が筆記、さらに福沢が加筆修正して完成したことを鮮やかに示す綿密な推敲の跡の残るもので、これも一太郎家に伝えられたものである。「ひゝのをしへ」は、福沢が明治初年、幼少の一太郎、捨次郎に対して書き与えた覚書で、「一、うそをつかない」に始まる日々の心がけが、平明にひらがなで箇条書きされている。

本年度新たに収蔵された資料としては、左頁に紹介した隈川宗悦・南条公健宛福沢書簡、福沢自筆の小泉信命名書のほか、伊東要蔵関係資料、伊藤某宛福沢書簡、向野新造・向野勘三宛福沢書簡、鍋島桂次郎旧蔵慶應義塾関係資料などを展示した。

鍋島桂次郎（1860−1933）は、明治12年頃在籍した塾員（明治39年特選）で、外務省に出仕しベルギー公使などの要職を歴任、のち貴族院議員となった人物で、桂次郎旧蔵の義塾同窓会通知や、子息の慶應義塾関係バッチ類、バックルなどが、昨年センターに寄贈された。

なお、福沢記念展示室を会場として使用したことを機に、２月より展示品の一部を入れ替え、福沢と朝鮮問題、慶應義塾と朝鮮留学生に関する資料を新たに展示することとした。

■ 新規採用専任所員内定

本センターには、現在、専任所員１名が所属しているが、この体制では、塾内諸機関への日常的な協力、資料の収集管理、研究・教育を遂行する上で、不十分であった。このため、専任所員の１名増員が、塾当局より認められた。これに基づき、運営委員会は、武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部専任講師の都倉武之君（日本政治史専攻）を、新任の専任講師として大学評議会に推薦、同評議会もこれを承認した。同君は、本年10月１日に着任する予定。

■ 第２分室ならびに作業室の開設

前号でお知らせしたように、三田メディアセンターより図書館旧館地階書庫内に2009年３月末日まで30㎡余のスペースを借用した。10月には、このスペースを資料等を収蔵する第２分室として整備した。また、それに伴い、余裕のできた北側書庫に作業スペースを設けた。このスペースの設置により、整理作業に際して資料を傷つける恐れが大きく軽減した。

■ 講演会・セミナー

本年度秋学期には、春学期にひきつづき「近代企業家と福沢諭吉」を統一テーマとして、講演会３回とセミナー １回を開催した。この企画に対しては、実業にかかわっている方々の関心も高く、多くの聴講者、参加者に恵まれた。

ところで、統一テーマを設定した企画には、機動的に個々別々に講演・報告をお願いしにくいという欠点もある。そこで､2007年度春学期は、統一テーマを設定せず、７頁に予告したような講演・セミナーを開催することとした。

■ ワークショップ

１月20日に、近世近代交流研究会との合同で、「中井信彦『歴史学的方法の基準』を読む」というテーマで、ワークショップを開催した。1990年に74才で亡くなられた故中井信彦氏は、近世の商品流通史、社会史、思想史に実証的でかつ理論的な優れた業績をのこされた。『歴史学的方法の基準』は、同氏が、厳しい思索により著した方法論の著作で、毎日出版文化賞を受賞している。今回のワークショップでは、30名を越える参加者により、無駄を切り詰めた用語でつづられている同書の解釈をめぐり非常に活発な議論が展開された。福沢研究センターが、単に学校史の機関ではなく、近代日本史研究に担うセンターとしても機能していることを示す企画であった。

■ 出張史料調査：伊東家（浜松）・伊藤家（天童）

2006年９月７日から11日に、所員、調査員、研究嘱託からなる総勢11名のチームにより、浜松市の伊東要蔵家所蔵資料の調査を行った。伊東要蔵は明治14年に義塾を卒業した地方起業家で後に国会議員。同家には名望家であった伊東家の化政期から昭和に至る史料が収蔵されており、また要蔵あての膨大な来翰の中には福沢諭吉をはじめとする義塾関係者からの書翰も数多くふくまれており、塾史にとって貴重な資料といえる。今回の調査では、同家史料の仮目録作成、写真撮影、借出し史料の選定などを集中的に行った。

また、10月28・29日には、所員・調査員２名により天童市の伊藤家資料につき予備調査を行った。伊藤家は幕末以来、地域の農地改良に尽力した名望家で、14代の宜七は明治20・21年に在塾。

■『近代日本研究』第23/24巻

『近代日本研究』第23巻（特集「大学史研究と大学アーカイブズ」）は、校了し３月刊行。24巻は刊行時期が、創立150年にあたる2008年の３月となるため、「創立150年特集」として編集することを検討中である。

■『慶應義塾150年史資料集』編纂の進行状況

別巻１『慶應義塾史事典』（2008年刊行）は、現在、分担原稿の回収中で、３月には集中的に原稿内容の整理統一を行う。別巻２『福沢諭吉事典』（2009年刊行）は、収録事項の第１次選択が終わった。上記別巻２冊については、進行が予定より遅れており、今後の作業促進が必要。本編の第Ｉ期第１巻～第４巻の編集も進行中で、特に第１巻は、基礎的資料の整理がおおむね終了しつつある。

■ 創立150年記念展覧会準備への協力

創立150年記念事業委員会が、2008年末から複数会場での開催を企図している展覧会に関して、福沢研究センターは、展覧会のストーリーの作成、展示品の選定などに関して協力中である。

■ 小泉信三博士没後40年記念展示会延期

前号でお知らせした「小泉信三博士没後40年記念展示会」は、塾当局が開催時期を再考し、延期することとなった。

■ 諸会議

＊平成18年度運営委員会
臨時第１回（９月６日：図書館旧館小会議室）
専任所員の新規採用について
臨時第２回（10月６日：図書館旧館小会議室）
新規採用専任所員の推薦について
第２回（11月17日：北館１階会議室）
1. 平成19年度設置講座、2. 19年度予算申請ほか
＊平成18年度センター会議
第２回（12月８日：北館会議室２）
設置講座、予算申請、専任所員人事ほか
＊平成18年度執行委員会
第２回（10月12日：図書館旧館展示室）
第３回（２月28日：図書館旧館小会議室）
＊『近代日本研究』編集委員会
第23巻第２回（９月29日：図書館旧館展示室）
第24巻第１回（２月８日：図書館旧館展示室）
＊創立150年記念誌刊行委員会
第３回（11月10日：図書館旧館小会議室）
＊『慶應義塾150年史資料集』編纂委員会
第17回（９月20日：図書館旧館小会議室）
第18回（11月２日：北館１階会議室）
第19回（12月20日：北館１階会議室）
第20回（１月23日：南館３階会議室）
＊『福沢諭吉事典』編集委員会
第６回（９月26日：図書館旧館小会議室）
第７回（10月25日：図書館旧館小会議室）
第８回（12月15日：図書館旧館小会議室）
第９回（１月26日：図書館旧館小会議室）
＊『慶應義塾150年史資料集』第１巻「塾生・塾員情報集成」編集委員会
第３回（10月６日：図書館旧館展示室）
第４回（11月10日：図書館旧館展示室）
＊『慶應義塾150年史資料集』第２巻「教職員・教育体制関係資料」編集委員会
第３回（10月２日：センター内事務室）
＊『慶應義塾150年史資料集』第４巻「諸統計資料集成」編集委員会
第３回（10月10日：図書館旧館展示室）
＊創立150年記念展覧会ワーキンググループ会議
第１回（８月４日：図書館旧館小会議室）
第２回（９月12日：図書館旧館小会議室）
第３回（10月５日：北館会議室１）
第４回（11月６日：図書館旧館小会議室）
第５回（12月８日：図書館旧館小会議室）
第６回（１月24日：図書館旧館小会議室）
第７回（２月23日：図書館旧館記念室）
＊『時事新報』社説一覧・索引作成に関する検討会（12月27日：図書館旧館展示室）
＊ワークショップ
第７回（１月20日：第１校舎145番教室）
「中井信彦『歴史学的方法の基準』を読む」（近世近代研究交流会と合同で開催）
＊『塾』編集会議（２月６日：塾監局第３会議室）

■ 展示会開催

＊第172回福沢先生誕生記念会展示（１月10日：図書館旧館展示室）

■ 資料貸出・協力

＊渋沢栄一記念財団付属渋沢史料館主催「近代日本の創造と『民』の力」（７月９～13日：福岡サンパレス）
＊2006年連合三田会パネル展（10月15日：日吉）
＊豊田市近代の産業とくらし発見館企画展「宇都宮三郎　最初の近代技術者になったサムライ」（10月24日～12月24日）

■ 来往

＊ウィリアム・アンド・メアリー大学助教授バンコンパノール氏（経済学部訪問助教授）来訪（９月11日、10月31日）
＊東北芸術工科大学非常勤講師杉山真紀子氏、資料閲覧（９月12日）
＊みずほコーポレート銀行副頭取中山恒博氏、展示室を見学（９月29日）
＊港区芝地区総合支所地区政策課の河本氏、錦織氏、資料閲覧（10月13日）
＊(財)肥料科学研究所理事伊東正夫氏、静岡県浜松市市議会議員伊東真英氏ご夫妻が来訪（10月19日）
＊創価大学教育研究所神立孝一所長ほか４名来訪（12月６日）
＊宮内庁書陵部福井淳氏ほか１名、資料閲覧（12月19日）
＊塾員吉原稔氏（昭32法）、写真閲覧（１月18日）
＊中津市助役木村吉晴氏来訪（１月23日）
＊神奈川県立歴史博物館学芸員川口徳治朗氏、寺嵜弘康氏来訪（１月25日）
＊韓国延世大学歴史文化学科王賢鐘教授および２学年～４学年の学生約20名が見学（１月31日）
＊北海道木古内町木古内商工会事務局長伊藤光雄氏、「咸臨丸子孫の会」小林賢吾氏ほか５名が展示室を見学（13日）
＊ホーチミン市外国語情報科学大学グェン・ティ・ハイン・トウック氏来訪（27日）

■ 出張・見学

＊小室所長、西沢助教授、調査員で静岡県浜松市にある伊東家所蔵の資料を調査（９月７～11日）
＊赤堀係主任、全国大学史資料協議会2006年度総会・全国研究会に出席（10月12～14日：広島大学、呉市海事歴史科学館）
＊西沢助教授、酒井事務長、貸出・展示中の書幅交換のため、中津の福沢記念館を訪問（10月13～14日）
＊小室所長、旧邸保存会緊急理事会（10月19日開催）出席のため、中津へ出張（10月18～19日）
＊西沢助教授、明治維新史学会（会場：大阪商業大学）に出席（10月27日）
＊西沢助教授、福沢諭吉協会の会員および長南調査員とともに山形県天童市の市立図書館および伊藤家で資料調査（10月28～29日）
＊文学部樽井教授（所員・運営委員）、福沢諭吉記念祭全国高等学校弁論大会審査委員長として中津へ出張（11月16～17日）
＊西沢助教授、東アジア研究所のプロジェクトのため、韓国梨花女子大学等で調査（11月18～20日）
＊西沢助教授、甲南大学総合研究所の伊藤正雄旧蔵福沢諭吉研究資料整理プロジェクト参加のため出張（12月12～13日：甲南大学）

■ 講師派遣

＊西沢助教授、湘南藤沢中等部・高等部５年生の総合学習授業において「「中津留別の書」を読む《一身独立・一家独立・一国独立》」という演題で講演（10月12日）
＊小室所長、湘南藤沢中等部・高等部５年生の総合学習授業において「新たな社会と「人望」」という演題で講演（11月30日）
＊小室所長、湘南藤沢中等部・高等部５年生への学部説明会において三田キャンパスの歴史について概説（12月７日：518番教室）
＊経済学部池田教授（所員・運営委員）、福沢旧邸保存会からの依頼により法要に出席するとともに記念講演を行う（２月３日：中津）

■ 訃報

初代所長 石坂巌名誉教授ご逝去（12月28日）

■ その他

＊慶應義塾大学出版会より指定寄附金200万円（11月30日）
＊匿名による指定寄附金3000万円（１月17日）

スタッフ一覧

所　　長	小室　正紀	経済学部教授
副 所 長	寺崎　　修	法学部教授
	岩谷　十郎	同
	米山　光儀	教職課程センター教授
運営委員	池田　幸弘	経済学部教授
	岩﨑　　弘	幼稚舎教諭
	梅垣　理郎	総合政策学部教授
	小野　修三	商学部教授
	沢田　達男	理工学部教授
	竹内　　勤	医学部教授
	樽井　正義	文学部教授
	林　　温	同
	平野　　隆	商学部教授
	山内　慶太	看護医療学部教授
所　　員	有末　　賢	法学部教授
	井奥　成彦	文学部教授
	牛島　利明	商学部助教授
	大久保忠宗	普通部教諭
	太田　昭子	法学部教授
	大塚　　彰	志木高等学校教諭
	加藤　三明	幼稚舎教諭
	斎藤　暁子	女子高等学校教諭
	西沢　直子	福沢研究センター助教授
	藤田　弘夫	文学部教授
顧　　問	飯田　　鼎	名誉教授
	内山　秀夫	同
	河北　展生	同
	桑原　三郎	名誉教諭
	小泉　　仰	名誉教授
	佐志　　傳	元高等学校教諭
	坂井　達朗	名誉教授
	中村　勝己	同
	西川　俊作	同
	松崎　欣一	名誉教諭
客員所員	安西　敏三	甲南大学教授
	飯田　泰三	法政大学教授
	井田　進也	大妻女子大学教授
	區　　建英	新潟国際情報大学教授
	掛川トミ子	関西大学名誉教授
	片岡　　豊	白鷗大学教授
	我部　政夫	山梨学院大学教授
	川崎　　勝	南山大学教授
	佐藤　正幸	山梨大学教授
	白井　堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	進藤　咲子	東京女子大学名誉教授
	曽野　　洋	玉川大学助教授
	高木　不二	大妻女子大学短期大学部教授
	西田　　毅	同志社大学教授
	平石　直昭	東京大学教授
	浜野　　潔	関西大学教授
	平山　　洋	静岡県立大学助手
	藤原　亮一	苫小牧駒澤大学教授
	堀　　幸雄	
	前坊　　洋	東北公益文科大学助教授
	松沢　弘陽	
	松田宏一郎	立教大学教授
	宮村　治雄	成蹊大学教授
	森川　英正	
	山田　央子	青山学院大学助教授
	林　　宗元	韓国関東大学校教授
	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
研究嘱託	山根　秋乃	
	田中　康雄	
	金　　眞琡	
	巫　　碧秀	
事 務 局	酒井　明夫	事務長
	赤堀美和子	係主任
	勝又由紀子	嘱　託
	矢島由実子	同
	佐藤　利加	派遣スタッフ
	柄越　祥子	非常勤嘱託
	吉岡　　拓	同

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員７名
（３月31日現在）

慶應義塾福沢研究センター通信　第６号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日　2007年３月31日　（年２回刊）
編　集
発　行　慶應義塾福沢研究センター
〒108-8345　東京都港区三田2－15－45
電　話　03－5427－1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印　刷　（有）梅沢印刷所